高齢化とともに変わる津久見市の医療のかたち

― 入院後に「帰る場所がない」問題をみんなで考えてみませんか ―

津久見市医師会立津久見中央病院
院長 石川 浩一

津久見市では、これからますます高齢化が進みます。しかし実は、人口だけでなく高齢者の数も、２０３５年ごろをピークに減っていくと見込まれています。とはいえ、高齢の方がかかりやすい肺炎や心不全といった病気による入院は、しばらくは今のまま続くと考えられています。つまり、これからも高齢の方が急に体調を崩して入院する「高齢者救急」の対応は、地域にとってとても大切になります。

津久見中央病院では、こうした高齢者の救急対応や緊急入院を多く受け入れています。しかし今、大きな問題に直面しています。それは「退院したくても帰る場所がない」ということです。介護施設や在宅のサポート体制が十分でないため、病院での治療が終わっても安心して帰れる場所がないのです。その結果、病院に長く留まる方が増え、新しく入院が必要な人を受け入れにくくなるという悪循環が起きています。

津久見市は、全国平均と比べて療養病棟での入院が少なく、施設や在宅での受け皿が足りていません。一方で、往診や訪問診療は多く行われています。つまり、地域では「できるだけ家で過ごしたい」という希望が強いことがうかがえますが、そのために必要な医療・介護の支援を行う人材の高齢化や不足が問題となっています。全国的にも多かれ少なかれ同様の事情で、国の会議でも議論されています。

こうした現状を変えるためには、病院だけでなく、介護施設、開業医、市役所、市民のみなさんが一緒になって「どうすれば安心して退院できるのか」を考え、協力していくことが必要です。たとえば、退院後の生活を支える医療介護福祉資源の充実や、病院と介護施設が情報を共有する仕組みづくり、移動が困難な方を支援する仕組みなどが考えられます。

これからの津久見市では、「ほぼ在宅、時々入院」という暮らし方が当たり前になるかもしれません。そんな地域を実現するためには、病院も、介護も、地域の皆さんも、それぞれができることを考えていく必要があります。津久見中央病院は、高齢者救急にしっかり対応しながら、安心して退院できる地域づくりの中心として、これからも地域とともに歩んでいきたいと考えています。皆さんにもご意見をいただければ幸いです。次回は、当院の果たすべき役割や今後の取り組み等をお話しします。